



鴨川は北から南へ流れているのに、ときどき南から北へ逆流している小川がありますよね。皆さんはこれを不思議に思ったことはありませんか？ 実はこの小川は琵琶湖疏水といって、明治時代に造られた人工物であるため、京都の地形に逆らった流れ方をしているのです。

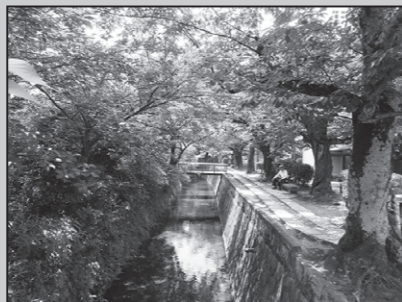
この記事では、私たちの身近にありながら実は京都にとって重要な歴史的建造物である、琵琶湖疏水について紹介させていただきます。

琵琶湖疏水は明治23年に竣工した、琵琶湖の水を京都へと運ぶための水路です。産業用の動力源、水運、灌漑、上下水道などの七つの目的を持って計画され、明治維新後の遷都によって一度は人口が35万人から20万人にまで減った京都をもう一度盛り上げるために大きな役割を果たしました。

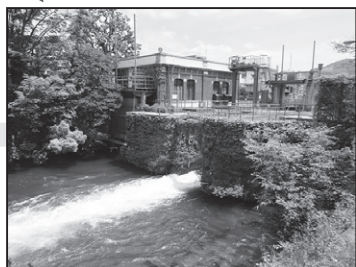
現在も発電所を動かし、上水道、そして観光地として、京都に暮らす人々の生活に深く関わっています。

略年表

起工式	明治22 (1889) 年	4月
竣工式	23 (1890) 年	6月
蹴上発電所完成	25 (1892) 年	11月
鴨川運河完成	28 (1895) 年	2月
京都電気鉄道開業	35 (1902) 年	4月
市電開業	大正3 (1914) 年	3月
夷川発電所完成	同年	5月
墨染発電所完成	昭和6 (1931) 年	4月



▲哲学の道と平行に流れる琵琶湖疏水



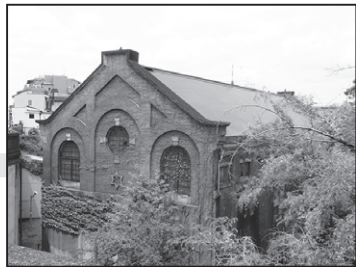
▲夷川発電所

夷川発電所

琵琶湖疏水沿線にある発電所の一つです。疏水を利用して、ここ夷川発電所の他に、蹴上発電所、伏見の墨染発電所も造られました。特に蹴上発電所は他の2カ所に先駆けて造られ、日本初の事業用水力発電所となりました。

ここで発電された電気は主に産業用として利用され、京都の紡績業や機械工業などの産業発展に大きく貢献することになります。発電所によって電力が供給されるようになったことで、送電開始から10年後には100軒以上の工場が京都に集まり、一時は東京・大阪の工場立地数を上回ったそうです。また、この電力を利用して、日本初の路面電車となる京都電気鉄道も運営されました。

これら3カ所の発電所は現役で稼働しており、「琵琶湖疏水の発電施設群」として土木遺産にも登録されています。



▲蹴上発電所

今出川通

2

南禅寺水路閣

南禅寺境内にあるレンガ造りの水道橋で、蹴上から分かれて北へ向かう水路を通すために建てられました。この水路閣は明治時代のもですが、現在では南禅寺の風景と調和し、京都でも有数の紅葉の名所として知られています。



この水路は舟が通れるほどの水量はありませんが、それでも毎秒2トンの水量を誇り、沿線では水車を用いた動力源として利用されていました。また東山に多く存在する寺社の庭園には、ここから水を引いた池が数多く存在しており、これらの寺社では防火用水としても琵琶湖からの水が使われています。

この水路は北大路通まで北上し、最終的に堀川に至ります。京都大学の北部グラウンドの東側を流れている小川も、この水路の一部です。

丸太町通

1

3

インクライン

山科からつながるトンネル出口と南禅寺の前にある船着き場の間は、水力発電を行うために36メートルの高低差があり、水路の流れもかなり速くなっています。そのため舟でさかのぼることは難しく、運河としての利用はできませんでした。これを解決するために造られたのがインクラインです。



インクラインとは舟を陸上で運ぶための設備で、地面に敷かれたレール上の台車に、舟ごと荷物を載せて坂の上まで引き上げていました。

疏水を使った水運は蹴上→大津を2時間半、大津→蹴上を1時間半でつなぎ、さらに伏見の運河から淀川に注ぐことで琵琶湖と大阪をつなぐ役目を果たします。最盛期には年間およそ3万5千艘が行き交いました。

現在では動力設備は取り除かれ、舟を載せた台車と一部のレールが観光用として残されています。また、春にはたくさんの観光客が訪れる桜の名所ともなっています。

至
伏見
↓

三条通

二条通

↑
至
堀川

凡例

川・水路

道路

2

3

山科
→